

都道府県別賞一等

命の奇跡

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 三学年

喜禎 あさひ

「喜禎さん、手術室に運んでいる時間がありません。ここで赤ちゃんを出しましょうね。」

そう言われた数秒後には、全身麻酔によって意識が失くなったという母の出産体験は、驚くような内容だ。十五年前の十月四日、日が変わって直ぐ、私は産まれた。二回の流産経験のある母は、主治医の先生の判断で、万が一に備えて鹿児島市の市立病院に、予定日の二カ月前から入院していた。出産数時間前、体調に特に問題はなく、消灯時間を前に、普段と変わらずベッドで横になりながらテレビを見ていた母は、「水分はしっかり摂って下さいね。」という、検診の度に主治医の先生から言われていた言葉を、なぜかその夜に限って、何度か思い出したという。そして、『夜中にトイレに行くのは嫌だな。』と思いつつも、しっかり水分を摂って、いつの間にか眠りに就いたそうだ。それから数時間後、尿意を感じて目が覚めたのは、二十三時を過ぎた頃。起き上がろうとした母は、お尻から腰の辺りにかけて違和感を覚え、ふとシーツを見てみると、なんと真っ赤な血が。驚きのあまり声が出ず、直ぐに、何度も何度もナースコールのボタンを押していたらしい。そして、そこからの時間は、今思い出しても身体が震える程の不安と恐怖で、声を荒げながら指示する数名の医師と、深夜にも関わらず集まってくる看護師の数の多さに、「赤ちゃんはどうなるの。どうしてこんなことに。赤ちゃんを助けて。」と叫んでいたことだけを覚えているそうだ。

「みんなをあんなに心配させたあさひが、こんなになるなんてね。」

もうすぐ十五歳の誕生日を迎える私を見ながら母が言った。予定より一カ月半も早く、千七百四グラムで産まれた私のあの日の姿を思い出したらしい。あの日、緊急帝王切開手術の後、まだ意識が朦朧とする中、主治医の先生から告げられた言葉から、今の私の姿は全く想像できないものだと言った。「赤ちゃんは、これから二十四時間が勝負です。状態に応じて処置していきます。ただ、二十四時間を無事に乗り切れたとしても、その後の成長は、長い時間をかけて見守っていかねばいけないかもしれません。」誕生の喜びよりも、不安で押し潰されそうになる自分に、母は、水分を多く摂ったお陰で出血に気付くのが早かったこと、その夜の当直はベテランの先生と看護師さんが多く、手術の判断、処置までの時間が短かったこと、そして、たまたま最新型の保育器が空いていたこと、そのいくつもの偶然は、きっと良い方へ向かうためのものなの

第59回中学生作文コンクール

だ、と言いかせていたと言う。それから私は、約二カ月の入院を経て、二歳半になる頃まで、定期的に市立病院で成長の経過を診てもらっていたらしい。もちろん、私の記憶の中にはないが。

そして、病院のスタッフの皆さんと、両親や祖父母、周囲のたくさんの人達の愛と助けをもらって、私は元気にもうすぐ十五歳になる。どうして今、このことを書いているのか。それは、「生命保険の作文」のことを母と話していて、「あさひのための最初の保険は、緊急帝王切開で保険が下りたことかな。」と母から聞いたからだ。三度目の妊娠は順調だと思っていたのに、急転直下、人生はいつ何が起るかわからない。母の話を聞きながら、万が一の時に備えて、金銭面においても少しでも安心を確保しておくことは、大事なことだと思った。そして、その後は、私の成長に合わせて、学資準備のための保険、生命保険にも加入してくれていると聞いた。

「十五年前の退院の日、『おめでとうございます。たくさんのお奇跡が重なりましたね。』と主治医の先生にかけられた言葉を、今でもよく思い出すのよ。」と、母は少し目を潤ませながら笑った。